2026.03.29.　　「子ロバに乗った王」

旧約　ゼカリヤ書９章９～１０節

新約　ヨハネによる福音書１２章１２～１９節

１．はじめに

今日から受難週に入ります。今週の金曜日にイエス様は十字架にお架かりになり、息を引き取られました。そして、イエス様はその三日後の週の初めの日、日曜日に復活されました。これがイースターです。この受難週は、キリストの教会が生まれたときから最も大切にしている特別な一週間と言って良いでしょう。私共の教会もイエス様が十字架にお架かりにならにられた日の金曜日に、受難日祈祷会を持ちます。今週イエス様の御受難を覚え、そして次の主の日にはイエス様の御復活を覚えてイースターを迎えます。

さて、イースターの一つ前の主の日、受難週が始まる今日ですが、これを教会は「棕櫚の主日」と呼んできました。英語ではパームサンデイ（ Palm Sunday）と呼ばれます。そう呼ばれるのは、この日イエス様はエルサレムに入られたわけですが、その時大勢の群衆が「ナツメヤシの枝をもって迎えた」（13 節）からです。ナツメヤシがパームです。イエス様がエルサレムに入られる場面は、全ての福音書に記されておりますけれど、人々がナツメヤシの枝をもって迎えたと記されているのは、ヨハネによる福音書だけです。新共同訳では「ナツメヤシ」と訳されていますが、口語訳聖書や新改訳聖書では「棕櫚の枝」と訳していました。棕櫚の枝は一本の枝に先に葉が手の指のようにたくさんに分かれています。一方、ナツメヤシの枝は一本の枝の両脇にたくさんの細長い葉が付いています。だいぶ形状が違いますが、エルサレムで一般的なのはナツメヤシですね。ナツメヤシの実からは油を取ったり、乾燥して食べたりととてもなじみ深いものです。それを手にして人々はイエス様をお迎えしました。

２．エルサレム入城

この日、イエス様はエルサレムに入られたわけですが、これを「エルサレム入城」と言います。この「入城」という字は、「城に入る」と書きます。「場所に入る」の「入場」とは書きません。神学生の時に教会学校の礼拝で黒板に説教題を「エルサレム入場」と書いて、終わってから高齢の婦人伝道師に「小堀君、字が違っていたわよ。場所の入場ではなくて、お城の入城よ。」と注意されたのを今でもはっきり覚えています。その時、私はイエス様がエルサレムに入られたことの本当の意味を良く分かっていなかったのですね。だから、字を間違えてしまったわけです。「城に入る」の入城は、その城の支配者や王様が入ること、特に支配者や王様が変わって、新しい王様が城に入

る時に用いる言葉です。つまり、イエス様がエルサレムに入られたのは、新しい王様として入られたということを意味しているいるわけです。群衆やイエス様の弟子たちがエルサレムに入っても「入城」とは言いません。更に言えば、イエス様は今まで何度もエルサレムに来ています。しかし、その時のことはエルサレム入城とは言いません。それは、この受難週においてイエス様は十字架に架けられる、そして復活する。更に天に昇られ、弟子たちに聖霊を下される。その一連の救いの御業によって、イエス様がエルサレムの王、神の民の王、メシア、キリストとして即位され、全ての人達の上に臨まれる、だから「エルサレム入城」と言われるわけです。

３．ホサナ

人々はこの時、をナツメヤシの枝を振り、「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」（13 節）と口々に叫んでイエス様を迎えました。これは詩編 118 編 25.26 節の言葉です。「118:25　どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。 118:26 祝福あれ、主の御名によって来る人に。」ヨハネによる福音書で「ホサナ」と記されているのは日本語にすると「どうか主よ、わたしたちに救いを。」と、ちょっと長くなってしまいます。ヘブライ語で「どうか、救ってください」を意味する ホーシーアー・ナー（hoshia　na）の短縮形 ホーシャ・ナー（hosha na）です。現代のキリスト教会では、元来の意味が失われて歓呼の叫び、または神を称讃する言葉となりました。アーメン、ハレルヤなどと共に、ヘブライ語をそのまま使われるようになったものの一つです。日本語で近いのは「万歳」という感じではないかと思います。ここで人々は、イエス様を「主の御名によって来る人」「イスラエルの王」と呼んでいるわけですから、この方こそメシア、キリスト、私達の王として迎え入れたことは明らかです。

では、どんなお方、どんな王としてイエス様を迎えたのかと言いますと、一言で言えば「ダビデのような王」ということになるだろうと思います。ダビデはイスラエルの民の歴史において、最も輝かしい時代の王でした。メシアはダビデの子孫として現れると預言されており、そう信じられていました。メシアは再びダビデ時代の栄光をもたらしてくれる王であり、人々はそのような王としてイエス様を迎えたということでしょう。

このことは、人々がナツメヤシの枝をもって迎えたという所にも現れています。なつめやしの枝を振って人々がイスラエルの王としてエルサレムに迎えた人が以前にもおりました。主イエスがエルサレムに入られる時より二百年ほど前、紀元前 164 年のことです。当時ユダヤはセレウコス朝シリアの支配の元にありました。この時、ユダヤの独立を求めての戦いがありました。マカベア戦争と言います。その時のことを記しているのが『マカバイ記』あるいは『マカベア記』と呼ばれるものです。これは外典として扱われています。事の発端は、当時ユダヤを支配しておりましたセレコウス朝シリアの王様が、エルサレム神殿にゼウスの像を建てるという暴挙を行ったことでした。ユ

ダヤ教を禁ずるという意図があったのですが、これに反対してユダヤの民は立ち上がります。その時のユダヤのリーダーがユダ・マカベア、ギリシャ語読みではユダ・マカバイオスでした。マカベアは戦いに勝利して、エルサレムを異教徒から奪還し、神殿を清めて主なる神に再び奉献したのです。イエス様の時代、このことを記念して、この福音書の１０章２２節以下に語られていた「神殿奉献記念祭」が行われるようになていました。このマカベアがエルサレムに入る時、人々はなつめやしの枝を振って迎えたのです。つまりなつめやしの枝を振るということには、エルサレムが異邦人の支配から解放されたことを喜び、エルサレムを異邦人の手から取り戻した王を迎えるという意味がありました。神の民を苦しめている異邦人に勝利し、その支配からの解放をもたらすイスラエルの王の到来を喜び迎えるために、人々はなつめやしの枝を振って迎えた。人々は自分たちを支配しているローマ帝国に勝利して、神の民ユダヤ人を解放してくれるイスラエルの王として主イエスを迎えたということです。

４．子ロバに乗って：平和の王

しかし、イエス様は人々が期待するような王としてエルサレムに入られたのではありませんでした。それが「イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。」（14 節）という姿にはっきり現れています。イエス様がエルサレムに入られるときに乗られていたのは「子ロバ」でした。ただのロバでもありません。「子ロバ」です。きっと、イエス様が乗られたとき、イエス様の足は地面に着いてしまうくらいではなかったかと思います。少しも威風堂々としていません。小さなロバの子の背中に乗って、ポコポコ進まれる姿は少しも勇壮ではなく、滑稽なほどではなかったかと思います。洋の東西を問わず、力の王、武力で平定した王や武将の銅像は鎧兜に身を包み、剣を振りかざして馬に乗っています。ロバになど乗っていません。イエス様が子ロバに乗られた理由ははっきりしています。先ほどお読みしましたゼカリヤ書 9:9 に「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。」と預言されているからです。イエス様はこの預言の成就としてエルメサレムに入られました。その預言の成就であるという明確な意思をもって子ロバに乗ってエルサレムに入られました。「娘シオンよ、娘エルサレムよ」と告げられておりますが、これはイスラエル、ならびにエルサレムを娘と表現する擬人法です。イエス様は明確にイスラエルの王、エルサレムの王としてエルサレムに入られたわけです。

では、この王はどのような王なのでしょうか？ 10 節に「わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」と告げられているように、戦いや力によって支配する王ではなく、諸国民に平和を告げる王です。「平和の王」です。この平和は、神様によって与えられる勝利

によってもたらされます。そして、この王は人々を支配し、虐げる王ではありません。神様に従い、高ぶることのない王です。平和の王、謙遜な王です。人々を仕えさせる王ではなく、人々に仕える王です。人々はそのような王を今まで見たことがありませんでした。ですから、子ロバに乗られたイエス様を見ても、それが何を意味するのか、きっと分からなかっただろうと思います。馬がなかったのでロバに乗っているのか、くらいに思っていただけだったかもしれません。しかし、イエス様は明確な意図をもって子ロバに乗ってエルサレム入城を果たされたのです。この時既に、イエス様は六日後の十字架をはっきり見据えておられました。そして、遂に時が来た。神様が定められた、神様の救いが成就するその時が来た、そのことをはっきり受け止めておられました。

５．平和はどこから？

平和を求めない人はおりません。みんな平和が良いと思っている。よく「日本人は平和ぼけしている」と言われますけれど、平和ぼけするほど日本が平和であったということは何と幸いなことかと私は思います。テレビのニュースでは毎日、戦争の映像が流れています。皆が平和を求めているのに、世界は平和にならない。どうしてだろう？と思います。この素朴な問いに、明確に答えることができる人がいるのだろうかと思います。簡単に理由は言えませんし、分かりません。しかし、平和が満たされない原因に、他の人よりも豊かであろうとする欲。或いは、自分や自分の国家・民族は偉大なのだと思いたい欲。そのためには他の人の嘆きの声など聞こうともしない身勝手さ。そして、そのような思いに引きずられてしまう人間の罪と愚かさがあることは確かなことでしょう。そして、この罪と愚かさを持っていない人も民族も国家もない。そして、互いにぶつかり、争いが生まれ、それはとめどない連鎖を生み出していく。そうであるならば、世界に平和が満ちてくためには、私共が自らの罪や欲から解放されなければならないことになります。しかし、自分でそうしよう、そうありたいと願っても、中々それが出来ません。この罪は私共の最も深いところに根を張っているからです。これを何とかすることが出来るのは、神様だけです。神様が私共を根本から造り変え、新しい人間にしてくださらなければなりません。これが起きるとすれば、それは奇跡です。イエス様はその奇跡を起こすために来られました。私共を造り変え、この世界を造り変え、御心が天になるように地にもなすために、イエス様は来られました。この奇跡は、私共の中で始まっています。完成はされていませんが始まっています。

イエス様がエルサレム入城を果たされたとき、イエス様の思い、神様の御心と人々との期待の間には、大きな隔たりがありました。人々はイエス様がローマを倒し、ローマから解放され、自分たちだけが平和になれば良いと考えていました。しかし、イエス様の思い、神様の御心はそうではありませんでした。全ての人は罪を犯しており、罪に支配されている。その罪を赦すために、新しい神の子とするため、イエス様は来られました。平和の王とはそういう王です。しかし、この時弟子

たちもまたそのことが分かりませんでした。しかし、分かるときが来ます。それはイエス様が復活されたときです。

６．十字架・復活の王

14 節から見てみましょう。「12:14 イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。 12:15 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、／ろばの子に乗って。」12:16 弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。 12:17 イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。」とあります。つまり、弟子たちはイエス様が子ロバに乗ってエルサレム入城されたとき、その意味が分からなかった。そしてイエス様が「栄光を受けられた時」分かったというのです。イエス様が栄光を受けられた時というのは、イエス様が復活されたときです。イエス様が復活され、そのイエス様に出会って初めて、弟子たちはイエス様が子ロバに乗られてエルサレムに入城したことの意味を分かりました。それは、イエス様が誰であるかが分かったということです。イエス様が十字架にお架かりになられた時も、弟子たちはそれがどういうことなのか、どういう意味があるのか、どうしてイエス様が十字架に架かられてしまったのか、全く分かりませんでした。分からなかったから、彼らはイエス様が捕らえられると散り散りに逃げ、恐れて家に鍵をかけてじっとしていた。それは、イエス様に対して「ダビデのような王」「力の王」という期待と理解しか持っていなかったからです。捕らえられ、十字架に架けられたイエス様は、弟子たちのイメージしていた神様に遣わされた王の姿とはかけ離れたものでした。自分たちが勝手なイメージを作っていただけだったのですけれど、彼らはそうは思わず「イエス様は神様から遣わされた王ではなかったのか」そう思ったことでしょう。イエス様をナツメヤシの枝を振って、自分たちが待ち望んでいた王として迎えた人々も同じだったと思います。自分たちが見ていた夢が破れ、やっぱりダメか、何も変わらない、そう思ってとても大きな失望に包まれたことでしょう。期待が大きければ大きいほど、それが外れたときの落胆は大きいものです。

しかし、イエス様は十字架で死んで終わりではありませんでした。三日目に復活されました。弟子たちはその復活のイエス様に出会って、イエス様が本当に預言者達が預言していたまことの「イスラエルの王」であり、「平和の王」であることが分かった。そして、どうして子ロバに乗ってエルサレムに入城されたのかも分かった。ザカリヤの預言したとおりだった。弟子たちは、この復活のイエス様と出会って、イエス様が語られたこと、為されたことの意味をはっきりと知ることとなりました。イエス様の言葉も業もただ一つのことを示していました。それは、イエス様が神様の御子であり、神様によって遣わされた平和の王であること。この方によって人は変えられ、世界は変

わり、まことの平和がやってくる。この方によって神様の救いの御業は為された。完成した。そのことを知ったのです。

７．復活がある

ヨハネによる福音書 11 章にはラザロの復活の出来事が記されております。ベタニアというエルサレム近郊の村で、イエス様が墓に葬られて既に 4 日もたったラザロを復活させられたという出来事です。この出来事は「死を打ち破られたイエス様」という大変な評判、噂が広がったことでしょう。そしてこの後の 12 章においてイエス様のエルサレム入城の出来事となりました。ラザロの復活の出来事の興奮が冷めない中でのエルサレム入城でした。人々はナツメヤシの枝を振ってイエス様を迎えました。しかし、この興奮は日・月・火・水・木・金の 6 日間で、冷や水を浴びせられることになります。十字架の上でイエス様が息を引き取ったからです。しかし、イエス様は復活されました。実にこのイエス様の復活から、キリスト教は始まりました。復活がなければ、もし十字架で終わっていたならば、イエス様が本当は誰であるかということは、弟子たちにも全ての人にも分かりませんでした。イエス様の本当の姿は隠されたままでした。しかし、イエス様は復活されました。ここに私共の希望があります。イエス様の十字架とは、復活されるイエス様の十字架、死に勝利されたイエス様の十字架です。イエス様は何のために十字架に架けられたのでしょうか。私共に平和をもたらすためです。死でおわならい命を与えるためです。受難週はイエス様おいたわしやと言って過ごし、イースターの朝は復活を喜ぶ。これは変でしょう。だって私共はイエス様が復活されたことを知っているのですから。その命に既に生かされているのですから。その命に私共を与らせるために、イエス様は十字架にお架かりなられました。ある牧師はこれを「痛ましい手続き」と言いました。本当にそうです。その痛ましい手続きによって、私共は一切の罪を赦していただき、神の子としていただいたのです。まことにありがたいことです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、御言葉ををもって神の御子であり、平和の王であられるイエス様が、私共のために十字架の道を歩まれたことを教えててくださいました。その御子の痛ましい手続きをもって私共は一切の罪を赦され、あなた様の子としていただきました。どうか私共が心の底から新しくされ、あなた様の子として相応しい歩みを御前に為していくことが出来ますように。主の平和をこの世界に与えてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン